

私的 高校演劇考

横内謙介

私が高校生だった頃、すなわち三十数年前のことですが、高校演劇というのは、ちょっと困ったモノであったと思います。何しろ演劇雑誌の編集長に、プロの世界を目指すなら高校演劇出身であるというよりは隠した方がよいよ、とアドバイスされたぐらいですから。

高校演劇のコンクールで大活躍し、すっかりその気になって劇団を旗揚げし、宣伝に飛び込んだ編集部で、これぞ手柄！と思って差し出したプロフィールを見るなり、当時のナンバーワン演劇誌『新劇』の梅本編集長からはつきりと言われたのです。

「高校演劇は変なクセが付いてダメだと業界では常識だから、出身なんて名乗ったら逆効果だよ」と。

確かに変なことにはあった。まだ新劇のテクニクこそが唯一の正統演技と信じている先生も多くて、つかこうへいを見て芝居に目覚めた我々は、よく標的にされたものです。

ふざける前に、鼻濁音を正しく発声して頂きたい！なんて。

セリフは三浦洋一風に怒鳴るのがカッコイイと信じていた我々には、まったく意味不明で、そもそも正しい演技を学びたいなんてこっちは微塵も思っていないし、はつきり言って、そういう人たちがバカにしておりました。今思っても、かなりの外れな批評です。だって我々は高校生がエロ本読んで、ワアワア騒いでるみたいなことを芝居にしていたのに、どこの高校生が鼻濁音を正しく響かせて、エロ話をするんですか？

一部の指導者や審査員のレベルがかなり低く、流行というものにも疎く、勉強もしていなかった。それは事実でした。

ただ、その一方で高校演劇の中にも、見識のある先生方もおられました。そういう人たちは、新劇的

技術に敬意を払いつつも、当時台頭していた小劇場派の演劇人とも積極的に交わり、コンクールの審査員に招いていました。私の作品を誉めてくれたのは、シエイクスピアアターの出口典雄さんと清水邦夫さんです。他校の顧問審査員が、こんなデタラメな芝居は邪道でしようと酷評するなかで、つかこうへいの影響を鋭く指摘しつつ、高校演劇も時代の影響を受けて変わって行くし、それで良いのだ、と弁護して下さったのです。

つまり過渡期でした。梅本編集長が語っていた、時代に取り残された高校演劇と、流行に影響された新しい高校演劇が少しずつ現れ始め、ぶつかりあう時代だった。

編集長も、その時はまだ新しい流れが高校演劇に生まれていることをご存じなかったのです。しかしそれから二年後には雑誌『新劇』で大々的な高校演劇特集が組まれることになりました。その誌面で高校演劇の可能性を熱く語っておられたのは、高校演劇に古くから熱心に関わっておられた、別役実さんや評論家の大笹吉雄さんでした。お二人とも現代演劇の中心人物です。ここにおいて、高校演劇は急速に現代演劇と結びついたのだと私は考えています。

私は高校生の芝居が何でもありで良いとは思いません。裸を晒したり、危険なことをやる必要はないし、一時間というコンクールの制限も妥当かと思いません。コンクール形式をどう言う人も多いけど、文化芸能なんて比べられてナンボのものでしょう。比較や批評を受けることがなかったら寂しいし、むしろ表現活動の醍醐味というべきです。コンクールがあるから注目もされるんだし、審査員が誰よりもバカなこともある、それぐらい高校生なら分かるはずですよ。一等目指して大いに競い合って頂きたい。

だからと言って私は高校演劇というものが決定的特殊な演劇などではないと思っています。高校演劇的発声とか演技法なんかはないし、その時々流行を毛口につけて、試行錯誤を繰り返す、それでまったく構わないと考えます。

ちなみに私は今はセリフをひたすら怒鳴るものとは考えていませんし、むしろ伝統的な演技法を大事にしたいと思っています。ただその価値観を劇団員以外と共有したいとは思わない。それは高校生の時から三十五年この道をさすらって来たオッサンが辿り着いた境地なワケで、今の若者には追求したい境地が別にあって当然です。

そしてこれだけは責任を持って申し上げますが、現代演劇界には正統な発声も演技法もございません。演出の仕方だって蜷川幸雄と栗山民也じゃ全然違う。それぞれが勝手に考えてコレで行くと決めるだけです。である以上、実は誰も高校生に、これが正しいやり方だよ、なんて教えられないのです。

しかし、だからこそ面白いのです、今の演劇は。



『リボンの騎士～鷲尾高校演劇部奮闘記～』
(原作：手塚治虫、脚本・演出：横内謙介)

横内謙介（ようちけんすけ）

劇作家・演出家・扉座主宰 日本劇作家協会理事
劇団公演のみならずトニセン（V6）の舞台や、スパー歌舞伎等、外部に幅広く作品を提供。近年、国民文化祭ふくおかオーブンニングフェスティバル「人生号」構成・演出、愛・地球博「地球タイヘン大講演会」脚本・演出、2006年フジテレビ系ドラマ「ダンドリ」脚本等、演劇以外にも活動の場を広げている。1992年、岸田國士戯曲賞、1999年には大谷賞を史上最年少で受賞。

高校演劇メモ⑥ 東日本大震災の影響

大震災の1週間後に北海道伊達市で予定されていた春フェスは、参加予定10校のうち4校が辞退したが2日間に短縮して実施。奇しくも、その全国大会は福島県文化センター大ホールで開催予定。他の部門は中止、あるいは福島県内でそのまま実施という状況の中、会場を香川県丸亀市の綾歌総合文化会館アイレックスに変更し、第35回全国高等学校総合文化祭演劇部門大会（福島大会東日本大震災復興支援香川大会）を開催した。まさに、福島大会のキャラクター「べしゅ」と高松工芸高校の生徒が制作した「りいぶ」（右）が手をつなぐ大会となった。

